HAL
open science

行動主義にもとづいたヨーロッパにおける日本語オンラインテストの開発 –新しい評価基準をめざして–

Tomoko Higashi, Chieko Shirota, Michiko Nagata

To cite this version:

Tomoko Higashi, Chieko Shirota, Michiko Nagata. 行動主義にもとづいたヨーロッパにおける日本語オンラインテストの開発 –新しい評価基準をめざして–. the 7th International Conference on Computer Assisted Systems For Teaching & Learning Japanese, CASTEL/J, Aug 2017, Tokyo, Japan. ⟨hal-01910452⟩

HAL Id: hal-01910452

https://hal.science/hal-01910452

Submitted on 10 May 2020

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire **HAL**, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

行動主義にもとづいたヨーロッパにおける日本語オンラインテストの開発
―新しい評価基準をめざして―

東伴子（グルノーブル・アルプ大学, Lidilem）、代田智恵子（グルノーブル・アルプ大学）、
永田道子（グルノーブル・アルプ大学）

Developing an action-oriented Japanese Online test in Europe
– for new assessment criteria

Tomoko HIGASHI, Université Grenoble Alpes, Lidilem, Chieko SHIROTA, Université Grenoble Alpes, Michiko NAGATA, Université Grenoble Alpes

要旨：グルノーブル・アルプ大学では、フランス国立研究機構（ANR）に採択された Innovalangues プロジェクトの一環として、2012 年から CEFR 準拠のオンライン診断付き評価システム SELF（Système d'évaluation en langues à visée formative）の開発が多言語で進められている。本発表では、SELF の紹介と 2015 年に開始された日本語のテスト開発の独自性および経過を報告する。特に欧州言語を基盤とする多言語プロジェクトの枠内で日本語テストはどう構築できるか、コンピュータベースのテストで行動主義的な要素をどのように測れるかという 2 つの課題について議論したい。

キーワード：オンラインテスト、CEFR、多言語、行動主義、オーセンティシティ

1. はじめに

2001 年に CEFR が公表されて以来、ヨーロッパの言語教育の現場では CEFR の導入が定着しつつあり、特にコースのレベル表示、到達目標および学習指導要綱は、CEFR の 6 段階の共通参照レベルや例示的能力記述文に準拠することが多くなった。このような傾向は、言語や機関を越えたヨーロッパ共通の言語観・評価基準の共有へと繋がり、学習者の移動や生涯にわたる学習の継続を容易にする。非ヨーロッパ言語である日本語もヨーロッパの各国の教育制度・教育機関における地位を保持し発展させるため CEFR に準拠した評価基準の構築が求められている。日本語教育において CEFR の文脈化の実践・研究はさまざまな形で進んでいるが、（cf. AJE-CEFR project, B1 project）ヨーロッパの学習者を対象とした CEFR 準拠のオンラインテストは管見の限り存在しない。ヨーロッパにおける日本語学習者の多様化や移動の増加を考えれば、CEFR というヨーロッパ共通の尺度によるヨーロッパの学習者の言語行動を考慮したテストの必要性は高いはずである。このような状況の中、2015 年グルノーブル・アルプ大学の多言語環境のプロジェクトにおいて日本語のオンラインテストの開発が開始された。

2.　多言語環境におけるテスト開発

2.1　SELF (Système d'évaluation en langues à visée formative) 概要

SELF（Système d'évaluation en langues à visée formative）は、フランス国立研究機構（ANR）の公募プロジェクト「革新的教育を目指した先駆的研究」に採択された Innovalangues プロジェクトの一環として開発中の CEFR 準拠の診断つきオンライン評価システムである。CEFR に準じた信頼性のある評価方式でプレイスメントテストとして、また熟達度レベル判定として、フランス・ヨーロッパの学習者に広く利用されることを目的として開発されている。行動中心／コミュニカティブアプローチに基づいて作成されたタスクを通して 3 技能（聞く・読む・書く）の熟達度を測定する。2017 年 2 月現在、英語、イタリア語、中国語、日本語、スペイン語、フランス語の 6 ヶ国語でテスト開発が進められており、英語、イタリア語、中国語はすでに実用化されている。

2.2　テスト開発プロセス

図 1 は、SELF 仕様のテスト開発プロセスとその中での日本語テスト作成の過程を表している。問題作成に関しては、話し合いによる問題案（タスクとアイテム）の検討、修正、統計分析による検証、考察、その後の修正など、統計的検証と質的検証の両面から何度も各アイテムの妥当性のチェックを行う。最終的に選ばれたアイテムがバンクに入り、テストに使用される。現在日本語のテスト開発は 6 の検証段階であるが、2017 年 9 月の新学期にはテストの施行を予定している。しかしその後も、フィードバックなどを通して、各アイテムの質的管理が続けられる。

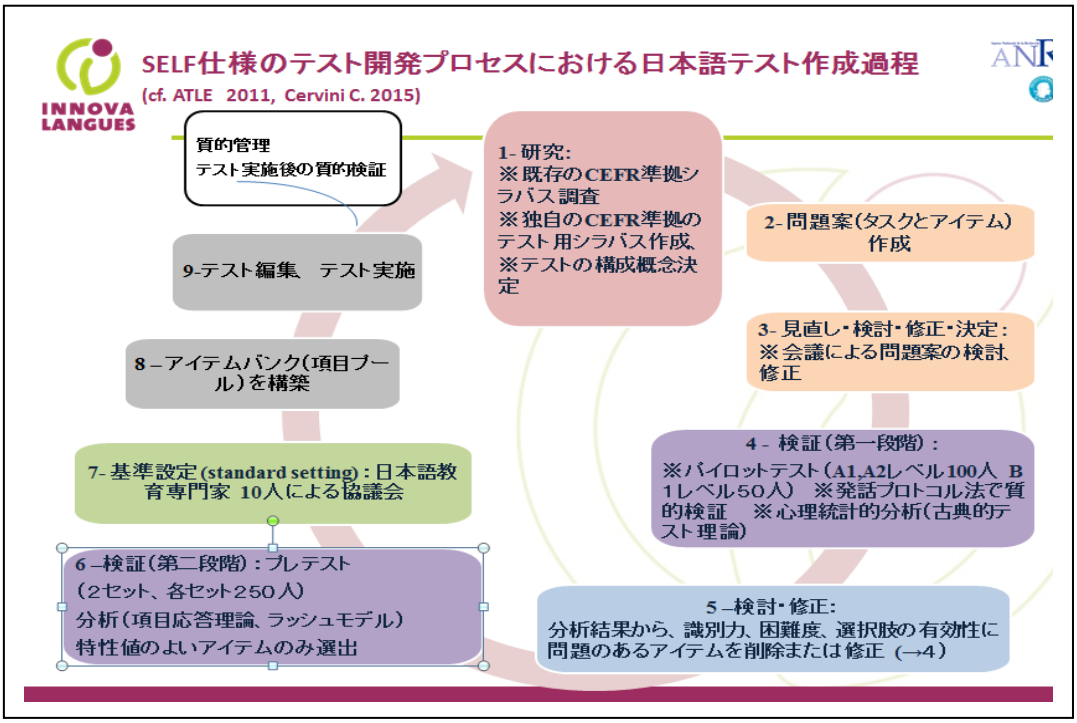

図 1：SELF 仕様のテスト開発プロセスにおける日本語テスト作成過程

3.　SELF における日本語テストの作成

本節では、SELF の枠組みの中で、日本語テストを作成する際の課題、主に、欧州言語を基盤とする CEFR の適用、コンピュータベースのテストにおける行動主義的要素の測定、という観点から、問題作成と留意点について記述する。

3.1　CEFR にもとづいたテストシラバスの作成

SELF のテストを開発している英語やイタリア語などのヨーロッパ言語には、既に欧州評議会に登録されている RLD（Reference Level Descriptions）という CEFR にもとづいた言語別の参照レベル記述がある。しかし、日本語にはないため、まず CEFR に準拠するテストシラバスを作成する必要があった。作成にあたっては、フランス、あるいは、ヨーロッパ圏の日本語学習者を対象とし、非ヨーロッパ言語としての日本語の特性、主に、表記法（ひらがな、カタカナ、漢字という３種類の表記法）とレジスター（言語使用域）の違いをどのようにシラバスに反映させるかが課題となった。

まず、対象となる受験者の言語活動については、CEFR の記述から、(1)より具体的なコンテクスト、(2)Can-do statement（能力記述）、日本語の特性という点では、(3)言語行動に必要な文法や表現、(4)語彙、(5)漢字という下位項目を設定した。

A1 レベルの読解問題の例：教室場面＞(1)教室の案内表示が理解できる＞(2)教室に行くことができる＞(3)「日本語の教室は２階の 405 号室です」＞(4)教室、階、～号室＞(5)教

また、漢字については、既存の漢字表は使用せず、受験者の実際のコミュニケーション活動に必要かどうかという観点から独自のリストを作成した（A1 : 57 字、A2 : 144 字）。

レジスターに関しては、A1 では文末表現は丁寧体、A2 では普通体を導入し、B レベルでは敬語、というように、熟達度が上がるにつれて広がりをもたせるようにした。

3.2　タスク作成におけるオーセンティシティ

SELF は、聴解（CO）、読解（CE）、文完成（EEC）の３つのタスクから構成されている。各タスクは、図 2 のように、基本的に、(1)コンテクスト、(2)問題文、(3)アイテム、(4)質問、(5)選択肢で構成され、(3)のアイテムは、(4)質問と(5)選択肢を含む。また、１つのタスクに複数のアイテムが設定される場合もある。

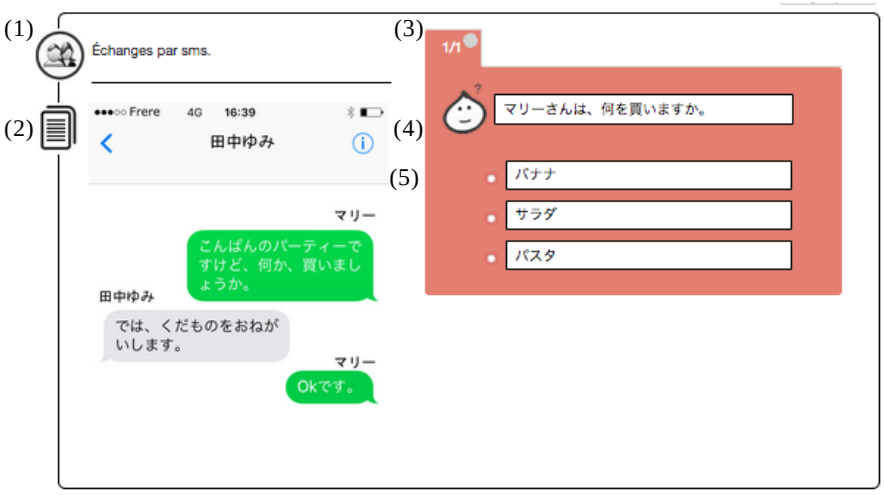

図 2：タスクの構成　A1 レベルの読解問題(CE)

SELF では、CEFR の行動主義にもとづいて、オーセンティックな問題文からタスクを作成するというのが前提となっている。ただし、A レベルなど、より低いレベルのタスクでは、レベルに合わせて、オーセンティックな素材を修正して問題文に使用することも可能とされている（Cervini & Othman 2015）。しかし、日本語の場合、前項でも述べたように、表記法とレジスターという点でヨーロッパ言語とは異なるため、特に A レベルでは、オーセンティックな素材をそのまま使用すると、レベル判定として妥当なタスクを作るのは非常に困難であることがわかった。例えば、CEFR の A1 には、「ホテルの宿帳に名前、国籍や住所といった個人のデータを書き込むことができる」(p.28, 吉島＆大橋 2004)という記述があるが、既に「国籍」という漢語は A1 レベルではなく、日本語がわからない場合は英語なども利用できるという点では、オーセンティックな言語活動とは言えないという問題点がある。そこで、A1 と A2 のタスクでは、可能な限りオーセンティックな素材に近い問題文を作成することにした。

このようにオーセンティックに近い問題文を作成するため、受験者の実際の言語行動に対応するような状況とインターアクション場面を設定することに留意した（Cervini & Othman 2015）。

例えば、状況設定としては、日本人の友人や教師、同僚、日本食レストランの店員との会話、sms やブログ、ソーシャルネットワークサイトの投稿などが挙げられる。また、インターアクションという観点からは、受験者が、聴解では聞き手、読解では読み手（上記、図 2 の(4)質問を参照）、文完成タスクでは書き手になるように設定した。

3.3　コンピュータベースのテストにおける行動主義的要素の測定

選択問題が主であるコンピュータベースのテストでは、行動主義的要素、特に、コミュニカティブ、あるいは、インターアクション能力を測定するのは難しいとされている。

そこで、SELF では、聴解や文完成問題では、談話完成タスク(discourse completion task :

DCT)、聴解や読解の問題では、その後の行動を問う質問（図 3）を設定することによって、インタラクティブな問題を作成している。

また、１回目のパイロットテストでは、コミュニカティブ、あるいは、インターアクション能力の測定の可能性を検討するため、一部の受験生を対象として、発話プロトコル法での調査を行い、問題の解答過程における認知活動の観察と分析も行っている（Higashi 2017）。

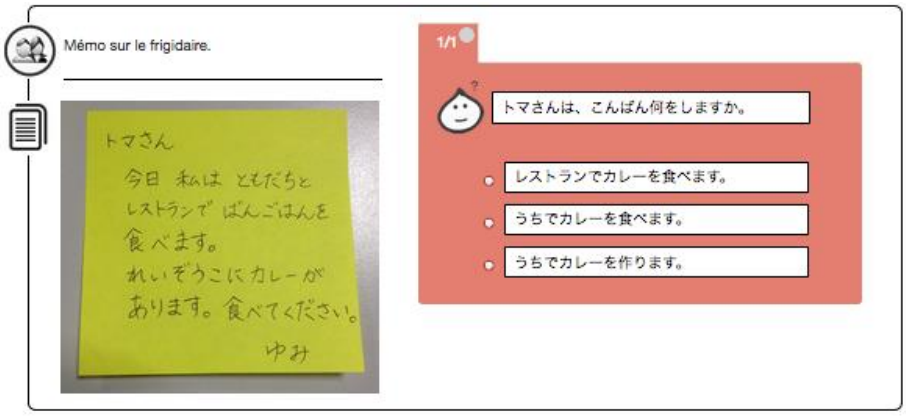

図 3：A1 レベルの読解問題(CE)

4. おわりに

当然のことながら CEFR 準拠のテストは単に「初級」を「A1」に差し替えたものということではない。学習者を社会で行動する者とみなす CEFR の言語観を念頭に置き、学習者の認知的背景、言語使用状況を考慮しつつ、学習者のコミュニケーション能力が適切に評価できるようなものでなくてはならない。評価と教育の現場は相互関係にある。今後 SELF の実用化を通して、ヨーロッパにおける行動主義的アプローチにもとづいた日本語教育の発展に寄与できればと考えている。

参考文献

ALTE. 2011. *Manuel pour l'élaboration et la passation de tests et d'examens de langue.* Conseil de l'Europe.

Bachman, Lyle F. Cohen, Andrew D. 1998. *Interfaces between second language acquisition and language testing research*. Cambridge University Press.

Chapelle, Carol A. Douglas, Dan. 2006. *Assessing Language througth computer technology*. Cambridge University Press.

Cervini, Cristiana and Othman, Sophie. 2017. CAHIER DES CHARGES 20/01/17 Action 4 : Lot « SELF ». Système d'Évaluation en langue à visée formative V.9. Grenoble

Cervini, Cristiana, Jouannaud, Marie-Pierre. 2015. Ouvertures et tensions liées à la conception d'un système d'évaluation en langues, numérique, multilingue et en ligne, dans une perspective communicative et actinnelle. Alsic. Vol.18 n.2.

Cervini, Criatiana, Goudin, Yoann. 2015. *SELF (Système d'évaluation en langue à visée formative) : état actuel : déploiement effectif du système et perspectives à court et à moyen terme*. Podcast http://podcast.grenet.fr/episode/self-systeme-devaluation-en-langue-a-visee-formative-etat-actuel-deploiement-effectif-du-systeme-et-perspectives-a-court-et-moyen-terme/

Conseil de l'Europe. 2008. Cadre européen commun de référence pour les langues : apprendre, enseigner, évaluer. Paris. Didier. 2005

Coulange, Sylvain. 2017. Processus de validation du test SELF (Système d'Évalution en Langues à visée Formative) japonais : premiers pilotages des items. http://innovalangues.fr/enseigner-apprendre-evaluer-japonais-perspective-cecrl-transformations-pratiques-pedagogiques/

Higashi, Tomoko. 2017. Parcours cognitifs chez des étudiants lors de la passation du test pilote SELF japonais - À partir du protocole think aloud -.http://innovalangues.fr/enseigner-apprendre-evaluer-japonais-perspective-cecrl-transformations-pratiques-pedagogiques/

Shirota, Chieko. 2017. Conception d'un test de japonais à partir du CECRL. http://innovalangues.fr/enseigner-apprendre-evaluer-japonais-perspective-cecrl-transformations-pratiques-pedagogiques/

吉島茂（訳・編）、大島理恵（他）. 2004.『外国語教育 II　外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』.東京: 朝日出版社.

櫻井直子・東伴子（編）『CEFR B1 言語活動・能力を考えるプロジェクト 2011 年度活動報告書』. 2012. http://japanologie.arts.kuleuven.be/nl/node/63

織田智恵・近藤裕美子・佐藤紀子・スルツベルゲル三木佐和子・東伴子. 2016.「ヨーロッパの日本語教育における評価基準の共有にむけての可能性と課題–大規模言語試験の分析からの考察 1」, 『AJE‐CEFR Project 報告書』1-110. http://www.eaje.eu/media/0/myfiles/cefr/dainibu-full.pdf